

Jonathn Swift の時代の科学と哲学

後 藤 愛 司

Sur les Pensées Scientifiques et Philosophiques du Temps de Jonathan Swift.

Aiji GOTO

Dans la troisième partie de «Gulliver's Travels», Jonathan Swift fit la critique de la science et de la philosophie de son siècle. En analysant cette partie, je veux éclaircir les points suivants.

- 1) Les problèmes scientifiques du 18^e siècle sont considérés comme le développement de la métaphysique du 17^e siècle.
- 2) Les pensées préscientifiques du 18^e siècle sont considérées comme les efforts pour dépasser la contradiction entre le mécanisme et le vitalisme.

1. Gulliver's Travels 第3部の問題性

私があつかう対象は、Jonathan SwiftのGulliver's Travels第3部の記述である。これはGulliver's Travels(以下G. T.)製作順序の中では最終時期、時代にして1724~1725年頃に完成しているが、このG. T. という作品が20数年にわたる作者の努力の積みかさねである以上、最終作品の背後には、多くの構想上の変化がうかがわれる。

G. T.の最初の発想は1714年ごろに、Memoirs of Martinus Scriblerusという共同製作文集への参加を契機にして、構想されたことはよく知られている。Swiftの製作分担分は日の目を見なかったが、この時「小人の国」「哲学者の国」に関する断片が書かれたらしい。

「小人の国」は最初の発想の原点として作品全体の緒となり、また彼の方法上の基礎となっていることは疑いの余地がない。

しかし、「哲学者の国」に関しては、奇妙なことに、最初の発想において重要な地位を占めながら、製作途上、つぎつぎ後まわしにされ、相当の苦勞を経て、やっと最後に一応の完成をみている。¹⁾(しかも文学的評価としては、散漫で、平凡で、統一がないとされている。)

私は、この理由は発想上の矛盾を解消しきれなかったことにあると思う。その発想とは、次の2点である。

- i) 対象を見る視点の極端化による、風刺作品の構想²⁾
- ii) 自然科学、哲学上の問題を基本的な発想にまで単純化して、本質をえぐりだし、そこから展開の可能性を描き出そうとする構想³⁾

約言すれば、これはi) 風刺文学とii) ユートピア文学との矛盾である。

Swiftは、この両面の発想の間で悩みながら、結局は彼の資質に最もあった風刺文学として、作品を形象化したのであるが、ユートピア文学的発想は、常についてまわり、1部、2部、4部ではそれがかろうじて処理しきれているが、第3部では処理に失敗したというのが真実のようである。

しかし、私にとって最も関心があるのは、この文学的には失敗したユートピア文学的側面である。なぜなら、この中に、17世紀から18世紀にかけての人間と科学をめぐる思想上の諸問題が原理的に把握されており、現代からみれば、近代社会全体にかかわる思想上の苦悩の表現として、我々に提示されているからである。

2. 機械論的自然観の問題

一般に、機械論的自然観は、近代科学を支配した中心思想のひとつとして、考えられている。しかし、この場合、GalileiからNewtonにかけての、力学と物理学における数学的処理の側面が、いつも強調されすぎている。

たしかに17世紀は物理学と幾何学の世紀であった。しかし17世紀末から18世紀にかけて、自然科学研究の力点が、化学と生物学に移行⁴⁾している点を見のがしてはならない。

私は、この問題の源泉はもう少し古く17世紀初頭にまでさかのぼると思う。

例えば、DescartesはLa Mettrieにつながる動物機械論の提唱者として知られている。彼はDiscours de la Méthode第5部において、Harveyによりながら、人間の心臓の機能を解説する中で、次のようにのべている。...ce mouvement, que je viens d'expliquer, suit aussi nécessairement de la seule disposition des organes qu'on peut voir à l'oeil dans le coeur, et de la chaleur qu'on y peut sentir avec les doigts, et de la nature du sang qu'on peut connaître par expérience, que fait celui d'une horloge, de la force, de la situation et de la figure de ses contrepois et de ses roues.⁵⁾

私がいま説明したこのような運動も、時計の運動がその平衡錘やその歯車の力、位置、ならびに形状からそう結果するのと同じように、心臓にあっては眼で見られる器官の配置、あるいはそこで指に感じられる熱、あるいは経験によって知られる血液の性状、これらのものから心率的に結果するものである。

(落合太郎訳)

ここで時計における力学的法則性が、熱とか血液の性状といった、化学的、生物的性質におきかえられていることに注意したい。また、この少し後に次のような記述がある。

Et enfin ce qu'il y a de plus remarquable en tout ceci, c'est la génération des esprits animaux, qui sont comme un vent très subtil, ou plutôt comme une flamme très pure et très vive qui, montant continuellement en grande abondance du coeur dans le cerveau, se va rendre de là par les nerf dans les muscles, et donne le mouvement à tous les membres;⁶⁾

最後に、これらすべてのことにおいて最も注意せらるべきは、動物精気の発生ということである。これはきわめて微妙な気流、あるいはむしろ、きわめて純粋できわめて強烈な焰のようなものであって、脳へとぼってゆき、そこから神経をとって筋肉のうちに浸みわたり、身体のあらゆる部分に運動を

与える。

(落合太郎訳)

ここでは、動物の運動は、力学的な運動としてではなく、動物精気、気流、焰といった、今日のみからみれば非科学的な比喩におきかえられている。やはりDescartes自身、意図してかしらるか、力学のみで生命体が把握できないことを述べているわけである。⁷⁾ 力学的法則性を、自ら養いつつ、自己運動する生命体に適用する時、問題は、かのオートマトン⁸⁾の可能性の問題に結果する。この時代のオートマトンは、時計をモデルにした、機械的運動体として様々に構想された。しかし、時代が18世紀に近づくにつれて、オートマトンは生物体との関連で考えられるようになり、この時、機械論は、錬金術その他の疑似科学の影響の下で、生命主義化されて、機械運動の法則性と生命運動の法則性が混同される時期にいたることになる。

私は、ここでは、力学的自然と生命的自然の断絶をのりこえることが、この時代の問題の一つであったことを確認するととめよう。⁹⁾

さて以上のような問題状況の中で、自然学者達の努力はどのような姿をとったかを、以下Swiftの記述によってみてみよう。

He had been eight years upon a project for extracting sun-beams out of cucumbers, which were to be put into vials hermetically sealed, and let out to warm the air in raw inclement summers. He told me he did not doubt in eight years more he should be able to supply the Governor's gardens with sunshine at a reasonable rate;¹⁰⁾

彼は8年間胡瓜から日光を抽出する計画にとりこんでいた。つまり、日光を完全に密閉した壺の中に入れておいて冷たく不順な夏に大気を暖めるために放出しようというのである。もう8年もすれば、知事の庭に、相当程度に日光を供給することができようと、彼は私に言った。

ここでは、エネルギーの転化過程が問題である。つまり、日光が胡瓜になるという自然過程がある以上、その逆行過程もなりたつはずだという論理である。力学的なオートマトンの可能性をめぐる問題の中では、生命現象が力学的過程と同一視される場合がある。つまり、時計を逆回転させることができるように、生命体の反応を逆転できると考えるわけである。もっとも、このSwiftの

記述は、生命の現象と化学的反応を問題にしているのであって、力学的な問題をとりあつかってはいない。しかし、この時代には、化学的反応も力学的にとらえられていたのである。

I saw another at work to calcine ice into gun-powder,¹¹⁾

私は氷を煨焼して火薬にする仕事をしているもう一人の男に会った。

煨焼現象は、物質が、個体、液体、個体と変化する現象であるから、このように、この現象を化学反応の様々な領域に適用しようとする上の記述の中には、化学反応の本質が逆行可能な過程であるという暗黙の前程が存在している。

したがって、このような機械論的な自然観では、生命現象と化学的現象は、ともに、力学的にとらえられているといえる。さらにいえば、彼等は、人間という生命体をも、力学的にとらえている。それは医療手続きを可逆的な操作としてとらえているからである。¹²⁾

ところが、これが、社会集団、国家の問題にうつると次のようになる。

There was a most ingenious doctor who seemed to be perfectly versed in the whole nature and system of government. This illustrious person had very usefully employed his studies in finding out effectual remedies for all diseases and corruptions, to which the several kinds of public administration are subject by the vices or infirmities of those who govern, as well as by the licentiousness of those who are to obey. For instance, whereas all writers and reasoners have agreed, that there is a strict universal resemblance between the natural and the political body; can there be any thing more evident, than that the health of both must be preserved, and the diseases cured by the same prescriptions?¹³⁾

政治の本性と体系について完全に精通しているらしい最も有名な先生がいた。この有名な人は、彼の研究を大変有効につかかって、為政者の悪徳や欠点、従う者の放縦によって、各種公共支配機関がおちいているあらゆる種類の病いと腐敗をいやす、効果的な手段を見つけようというのである。たとえば、

あらゆる著作家や論者がいうように、政治的組織体と自然的肉体との間に厳密な一般の類似が存在する以上は、両者の健康も同じ方法で維持され、病いも同じ方法でいやされるということ以上に明らかなことがあるか。

おそらく、これは Hobbes を念頭においた記述であろうが、政治的組織体 (political body) と自然的肉体 (natural body) はアナロジカルに、とらえられている。ただ Hobbes の場合、common-wealth は artificial man としてとらえられ、人間はオートマトンとしてとらえられるというように、機械論的世界観は一貫性を持っている。¹⁴⁾

以上をまとめてみると、i) 社会集団が人間あるいは生命体の論理で語られる側面と、ii) 生命体の活動や化学変化が力学的論理で語られる側面の両面が混在している。この混在は、統一的に語られていない。そして、この、社会、生命、力学をつらぬく論理が、Swift の記述の中では、その場その場で、力点のおき方が変化している。そして、この動揺の中から、力学的世界観をのりこえようとする様々な試みが浮び上がってきているのである。

3. 実体論的障害とアニミズム的障害

前章で Descartes の機械論についてのべた際、彼が、力学的法則性を補うものとして、動物精気という仮想物を導入していた点をおもいおこそう。この比喩が導入されたのは、この時代には、我々の常識となっているような化学反応の理論が成立しておらず、力学的法則性をはみだす諸現象は、疑似科学的概念を適用しなくては、説明できなかったからである。

我々が今考察している時代にあっては、こうした概念は、おもに、化学の理論、特に燃焼をめぐる理論の中で、重要な役割をはたしている。

Gaston Bachelard は、この問題を「火の精神分析」(La psychanalyse du feu) の中で、具体的諸例をあげて分析を行なっている。彼は、そこで、前科学的思惟のおちいる誤謬を、実体論的障害 (obstacle substanti-aliste) と、アニミズム的障害 (obstacle animiste) の二つに分割する。¹⁵⁾

実体論的障害とは、物の性質や現象を、それをつかさどる実体によって、規定しようとする解釈である。したがって、化学反応現象は、そこに介在する何らかの実質のもつ作用とされる。例えば、火に関していえば、かの

フロギストン(燃素)¹⁶⁾に結集する考え方である。

Pour Carra, auteur souvent cité à la fin du 18^e siècle; (Dans la paille et le papier, le phlogistique intégrant est très rare, tandis qu'il abonde dans le charbon de terre. Les deux premières substances néanmoins flambent au premier abord du feu, tandis que la dernière tarde longtemps avant de brûler. On ne peut expliquer cette différence d'effets, qu'en reconnaissant que le phlogistique intégrant de la paille et du papier, quoique plus rare que celui du charbon de terre, y est moins concentré, plus disséminé, et par conséquent plus susceptible d'un prompt développement.)¹⁷⁾

18世紀末にしばしば引用された著作家カラによれば「麦わらと紙の中には、燃素は非常にまれである。ところが石炭の中には豊富にある。にもかかわらず、はじめの二つの物質は火をつけるとすぐ燃え上がる。ところが、あとのものは燃えるまでに時間がかかる。麦わらと紙の燃素は石炭のそれよりまれであるとはいえ、そこでは集中しておらず、散らばっており、その結果すばやく発展(拡散)しやすいということを知らずに、この結果の相違を説明することはできない。」

この引用にみられるような実体化を、Swiftは次のような記述の中でとりあつかっている。

I saw another(中略)
who likewise showed me a treatise he had written concerning the malleability of fire, which he intended to publish.¹⁸⁾

私は、もうひとりの男に会った。彼はまた、火の展性について書いた論文を私に見せた。彼はそれを出版しようとしていたのだ。

展性というのは、本来、金属に個有の性質であって、火のような、たんなる化学反応現象には無縁のものである。しかし、火が実体化され、何らかの実体、あるいは原素であるならば、その実体に個有の属性、性質が要請される。もともと、実体論的障害というものは、性質の存在から、それをつかさどる実体を要請するものであるが、ここでは、実体化されたのちの空想的思弁が問題になっているのである。しかし、この実体化は、何らかの空想的実体を導入することによって、過去の力学的論理

だけではとけなかった現象を説明しようとしている。

他方、アニミズムの障害についていえば、これは、力学的に解明できない現象を、生命体あるいは生物のアナロジーで説明しようとするものである。ここには、物質と生命の混同がある。しかしながら、これは、この時代において、生命体を力学的機械としてとらえようとする考え方に対立して、生命体を鉱物よりも基本的なものとする、いわゆる物活論的な直観が支配していたからである。¹⁹⁾

例えば、火についてBachelardは17世紀の作家Blaise Vigenèreの言として次のような引用をしている。

((Les Egyptiens le disaient être un animal ravissant et insatiable; qui dévorait tout ce qui prend naissance et accroissement; et enfin soi-même, après qu'il s'en est bien (peù) et gorgé, quand il n'a plus de quoi se repaître et nourrir; parce que ayant chaleur et mouvement, il ne se peut passer de nourriture et d'air pour y respirer).²⁰⁾ *feu

エジプト人は、それ(火)を魂をうばうほど貪欲な動物であるといった。それは誕生し成長するすべてのものをむさぼり食う。そして、よく食べ満腹したあとで、食べるものがもはやなくなると、自分自身をむさぼり食う。なぜなら、それは熱と運動性を持っているので、食べものと、呼吸するための空気なしではすまずことができないからである。

このような、火に代表される化学現象を、消化作用という生命体の作用とアナロジカルにとらえる、この直観は、17世紀18世紀においては、最も一般的な考え方であった。

Swiftの記述の中には、化学的問題をアニミズム的なものに、直接結びつけている記事は、ほとんどない。しかし、この時代の科学の一面を支配した消化作用の神話は、無数にとりあげられている。代表的な例を2つほどあげておこう。

i) 蜘蛛をつかって布をつくらせようという計画について次のような記述がある。

And he proposed farther that by employing spiders the charge of dyeing silks should be wholly saved, whereof I was fully convinced when he showed me a vast number of flies most beautifully coloured, wherewith he fed his spi-

ders, assuring us that the webs would take a tincture from them;

そして彼はさらに次の提案をした。つまり、蜘蛛をつかえば、絹を染める費用が完全に節約できるといのである。このことを、私は、蜘蛛に食べさせるための非常に美しい色をした無数の蠅を、彼が見せた時、完全に納得した。そして、彼は蜘蛛の巣は、それら(蠅)から色をうけとると、我々に保証したのだ。

ii) I was at the mathematical school, where the master taught his pupils after a method scarce imaginable to us in Europe. The proposition and demonstration were fairly written on a thin wafer, with ink composed of a cephalic tincture. This the student was to swallow upon a fasting stomach, and for three days following eat nothing but bread and water. As the wafer digested, the tincture mounted to his brain, bearing the proposition along with it.²¹⁾

私は数学学校へいった。ここでは、ヨーロッパでは、ほとんど想像もできないような方法で、先生が生徒達を教えていた。まず問題と証明が、頭脳チンキでつくったインクで、薄い煎餅の上にきちんと書かれた。これを学生は、絶食しておいた胃の中に飲みこむのである。そして、その後3日間、パンと水しか食べない。煎餅が消化されるにつれて、チンキは脳に上がっていき、それと一所に問題をはこんでいくのだ。

4. 思弁的学問と実践

Swiftは、思弁的学問についてのべる際、奇妙な機械を構想している。これは、さいころぐらいの大きさの無数の木片を細い針金でつないだ20フィート四方ぐらいの枠(frame)であって、そのまわりに40個のハンドルがとりつけてある。個々の木片の表面には、その国の言語の中にある、あらゆる単語がその変化形をふくめて、書かれた紙がはりつけられている。さて、周囲のハンドルをまわすと、木片が回転して、枠の表面にあらわれる単語の配列が様々に変化する。この結果、偶然できあがる文章を収集して、百科学の体系をつくらうとしているのである。この疑似コンピューターシステムに関して、次のような叙述がある。

He said perhaps I might wonder to see him employed in a project for improving speculative knowledge by practical and mechanical operations. But the world would soon be sensible of its usefulness, and he flattered himself that a more noble exalted thought never sprang in any other man's head. Every one knew how laborious the usual method is of obtaining to arts and sciences; whereas by his contrivance the most ignorant person at a reasonable charge, and with a little bodily labour, may write books in philosophy, poetry, politics, law, mathematics, and theology, without the least assistance from genius or study.²²⁾

思弁的知識を実践的(practical)で機械的(mechanical)な操作によって、改善しようとする計画に、彼がたずさわっているのを見て、私がおそらく驚嘆するであろうと、彼はいった。そして彼は、これ以上に高貴で高尚な考えは、かつて誰の頭にもおもい浮かばなかったということを得意がっていた。技術と学問に習熟する普通の方法が、いかに骨のおれるものであるかは、誰でも知っている。ところが、彼の装置をつかえば、最も無知な人でも、適当な費用で、そして、少々の肉体労働で、天才や研究の助けをかりずに、哲学、詩学、政治学、法学、数学、神学の本を書くことができるというのである。

思弁的学問をpracticalでmechanicalな操作で改善しようとするこの企ては、今日の科学万能、コンピューター万能の時代を先取りしているかのようである。アリストテレス以来、ヨーロッパの学問は、理論的、観想的なものを、実践的なものより優位においている。²³⁾近世の形而上学において、この実践的側面への関心は、たしかに顕著になってきた。しかし、具体的な諸学において、職人の経験的な知が純粹理論と結びつくことは、たとえそれが可能であった場合でも、錬金術や魔術的なものの影響下にあった。哲学上では、この実践的なものへの関心は、一方では、倫理学の理論的基礎づけとして、他方では、諸学の数学的基礎づけとしてあり、理論学という枠組の中で、一部門を形成しているにすぎない。

このSwiftの記述のような形で、実践的学をもって、思弁的学にかえようとする発想は、これまでのべてきたような機械論的な世界観の限界の内にとどまっていると

はいえ、根源的にいって、革命的である。

さて、Swiftの実践的関心が、どの点で具体的にあらわれているかという点、建築や都市構造をめぐってである。

Their houses are very ill built, the walls bevil, without one right angle in any apartment, and this defect ariseth from the contempt they bear to practical geometry, which they despise as vulgar and mechanic, those instructions they give being too refined for the intellectuals of their workmen, which occasions perpetual mistakes.²⁴⁾

彼等の家の建て方は大変まずい。壁はゆがんでいて、どの部屋にも直角は一つもない。そして、この欠陥は、彼等が応用幾何学(practical geometry)を軽蔑していることからおこっている。彼等は、これを俗なものであり(vulgar)、機械的(mechanic、職人のものという意味もある)なものだとして軽蔑している。彼等の与える指図は、職人の知性にとってあまりにも洗練されすぎているので、いつも間違いをひきおこすのである。

ヨーロッパの伝統の中では、建築や都市はある特殊な意味あいを持っている。以下にガレン(Eugenio Garin)の叙述を引用してみたい。

(前略) アルベルティの都市建設の目的は、階級の区分の明解にし、市壁や建物に精密な政治構造を対応させることにある。かくして建築家は、あらゆる都市活動の規定者、統率者と同義になる。アルベルティは、アリストテレスの言葉を自由に翻案して、建築学を諸学中の第1の学、あらゆる学の統一者にして女王と呼んだ。都市計画は、政治と関連しているどころか、それと一体化しており、その典型的な表現でさえある。

(中略) 都市計画者や軍事技術者や一般の芸術家たちの議論に対して、これまで以上の注意を払って見るならば、「科学的」という言葉の中には、人間や宇宙の共存と共同の利益のための建設を目的とし、科学と技術の総体を己れのうちに含むような実用的認識という観念があることに気づかれよう。(中略) 明らかにアルベルティの建築という言葉は、非常に広い意味を持っている。聖堂や城郭の建設、治水事業、堤防港湾建設、干拓事業、さらに造船や武器製作までもが建築の中に入る。またアルベルティにとって商品の流通と思

想の流通との間、「食料、香料、宝石などと事物の認識や情報、健康や生活に有益なすべてのもの」との間には、何らの違いもない。そして都市の肉体である建築物こそが、都市生活を現実化し、具体化し、その十全な活動を保証する。それ故、建築家は普遍的人間である。さらにいうならば、科学は現実への応用であり、政治的知恵と結びつくという点で、統治者は建築家となり、政治家は建築理論家となる。²⁵⁾

建築や都市が、理論と実践の統一の象徴であるならば、先のSwiftの叙述は、単なる実践への関心以上のものを含んでいる。この問題をもう少し明らかにするために、建築を問題にした別の叙述をとり上げよう。

There was a most ingenious architect who had contrived a new method for building houses, by beginning at the roof, and working downwards to the foundation, which he justified to me by the like practice of those two prudent insects, the bee and the spider.²⁶⁾

家をつくる新しい方法を考案した最も独創的な建築家がいた。彼は、まず屋根からはじめて、だんだんと土台にむかって作業をすすめるのだ。これを彼は、あの二種類の賢明な昆虫、蜂と蜘蛛が同じように行なっているという点で、私に正当化した。

蜂や蜘蛛が比喩としてでてくることに注目したい。これらの動物は、アリストテレス以来、最も勤勉で、器用で、賢明だとされている。²⁷⁾しかも、蜜蜂については、その社会構造までが、ギリシャ以来、相当くわしく知られている。²⁸⁾ こういう前程でSwiftの場合を考えてみると、この建築方法の問題は、知性とその実践的行動の結びつきの問題の特殊な側面である。

アリストテレスは「動物誌」の中に、つぎのような叙述を行なっている。

一般に生活法については、他の動物がヒトの生活をいろいろ模倣〔再現〕していることが観察されるであろう。しかも大きな動物よりはむしろ小さな動物において精密な知能が認められるであろう。まず鳥類ではツバメの造巢が良い例である。なぜなら泥にもみぐら混ぜるのにヒトと同じ順序でやるからである。(中略) イエバトについてはこういった〔ヒトに近い〕光景を示すような別の現象が見られる。²⁹⁾ (後略)

アリストテレスにとっては、人間の行動は理論的であって、それは単なる実践的なもの以上のものである。し

たがって、動物の実践的行動の中に、知性があらわれる場合、それは、人間の知性の模倣ということで片づけられてしまう、しかし Swift は、むしろ逆に人間の知性を動物の知的実践的総体の模倣としてとらえる。これは Gulliver's Travels 第 4 部 Houyhnm's における Yahoos という醜悪な人間像にも通ずる点である。したがって、人間の動物性を強調する方向は、アリストテレス以来の伝統的な考え方の転倒となる。

次に、上から下に建物を建てるという比喻をとりあげよう。Swift の上下の観念は、ある場合には、統治者と被統治者の関係の象徴である。³⁰⁾しかしながら、これはまた理論的なものと実践的なものの象徴にもなりうる。たとえば、ガレンはレオナルド・ダ・ヴィンチの都市計画として、次のような例をあげている。

この都市は、清潔を衛生とを旨とするために、海岸か河岸に築かれていて、階段でつながれた二層の地面からなっている。人は下層を通らずに、上層のすべての場所に行くことができるし、その逆の場合も同様である。下層では荷車や馬車の交通が行われ、さまざまな店が開き、商業が発達している。「この都市のどこかに行こうとする人は、上の道を通っても自由に行けるし、同様に下の道を通っても行けるだろう。上の道は荷車やその他同類のものも通らない、貴族階級専用の道路である。下の道は、荷車やその他の荷物など、民衆の用を満たすものが往来する道路である。隣合った家屋は、互に背を向けあっており、その間を下の道が走っている」レオナルドは、詳細な説明によって、この2つの平面の用途をはっきり区別し、その階級の違いを強調する。上層の面は「貴紳階級」であり、下層の面は——アトランティコ手稿の表現を借りるなら——「貧乏人階級」である。³¹⁾

ここでは、上下関係によって、貴紳階級と労働者階級が区分されるが、これを平面化したものとしては、プラトンの「クリティアス」における、アトランティスの都市、カンパネラの「太陽の都」の都市などにみられるような同心円構造がある。³²⁾これらのプラトニズム的な円形を理想とする諸理想都市においても、やはり、中心部をしめる貴紳階級と、周辺部の労働者、商人階級の居住域は分割されている。この場合、理論的なものを代表する貴紳階級と実践的なものを代表する労働者、商人階級との分割は明らかである。

以上のような事実を前程にして考えれば、Swift の上

下関係の比喻は、実践的なものを軽視する考え方に対する批判であると考えられる。

5. 認識と言語をめぐる問題

さて、ここで、観点を少しずらして、人間の認識能力をめぐる問題をとりあげよう。

There was a man born blind, who had several apprentices in his own condition: their employment was to mix colours for painters, which their master taught them to distinguish by feeling and smelling. It was indeed my misfortune to find them at that time not very perfect in their lessons, and the professor himself happened to be generally mistaken.³³⁾

生まれつき盲目の男がいた。彼は同じく盲目の数人の弟子を持っていた。彼等の仕事は、画家のために、絵の具を調合するのである。これを彼等の先生は触覚と嗅覚で区別するように教えていた。その時、彼等の練習が全く不完全なものであったことは、私にとって本当に残念なことだった。その上、先生自身、間違っただけでいいのだ。

ここで扱われているのは、おそらく Locke をめぐっての問題である。Locke が「人間知性論」を出版したのは1670年であり、Swift の時代とかさなっている。

周知のごとく、Locke をめぐる哲学上の中心問題は、彼の生得観念 (innate idea) の否定をめぐるおこる。Locke のように、生得観念を否定する以上は、我々の観念の起源は、経験的なものとなり、観念は感覚を通じてのみ成立することになる。しかしながら、Locke 自身は感覚以外に、反省 (reflectin) の作用を認めたり、あるいはまた、第 1 次的性質を第 2 次的性質に対して認めたりしたように、純粋に経験論的立場にたっていない。したがって、この Locke 自身が持っていた矛盾をいかにして解くべきかが、この時代の哲学者の問題のひとつとなっていたのである。これを Swift は、盲人がいかにして色彩を知るのかという形におきかえているのだ。

人間の心が、Locke のいうように、tabula rassa (empty tablet) であり、感覚を通じてしか、認識が行なわれないならば、我々は当然、五官を通じて主観にもたされる 2 次的性質しか認識できない。もちろん、感覚の欠如は、それを通じて生じる感覚の欠如を結果する。³⁴⁾だから、Swift の述べたこの盲人の戯画は、この Locke 的な感覚

論を問題にしたものであろう。

この問題の解決は、18世紀の中ごろまで待たねばならなかった。つまり、Diderotはかの「盲人書簡」(Lettre sur les aveugles 1749年)において、盲人がいかにして幾何学(これは視覚を媒介とした学とされていた)を行なうかという問題を綿密に考察しているからである。

最後に言語をめぐる問題にうつろう。17世紀における言語の問題は、近年 Chomsky を中心とする言語学者や哲学者の間で、現代哲学の中心問題の一つとして、クローズアップされてきている。したがって、この問題を総合的にあつかうと、17世紀から18世紀にかけての思想史全体の再検討となるので、中心的な問題は、次の機会にゆずって、避けて通ることとする。ここでは、これまでのべた問題と関連した点だけに限ることにした。

Swiftは、国語学校(School of language)における教授達の国語の改善案として次のような2点をのべている。

The first project was to shorten discourse by cutting polysyllables into one, and leaving out verbs and participles, because in reality all things imaginable are but nouns.

The other project was a scheme for entirely abolishing all words whatsoever; and this was urged as a great advantage in point of health as well as brevity. For it is plain that every word we speak is in some degree a diminution of our lungs by corrosion, and consequently contributes to the shortening of our lives. An expedient was therefore offered, that since words are only names for *things*, it would be more convenient for all men to carry about them such things as were necessary to express the particular business they are to discourse on.³⁵⁾

まず最初の計画は、多音節語を単音節語に切りつめ、動詞と分詞を省略して、対話を短くしようとしたことだった。なぜならば、實際上、想像できるあらゆる物は、単なる名詞だからである。

もう1つの計画は、言葉という言葉全てを完全に廃止する案だった。そしてこれは、簡明さの点と同じく、健康上でも大きな利点を持つものだと主張されていた。というのは、我々の話すどの言葉も侵食作用によって、ある程度、我々の肺を減少させてお

り、その結果、我々の命を縮めるのに寄与していることは明らかだからである。そこで、次のような便法が提案された。つまり、言語は単に物の名前にすぎないのだから、話そうとする個々の用件を表現するのに必要な物をもっていく方が、すべての人にとって、より便利だろうというのである。

ここに述べられた2点は、方法が違うが共に言語に対する不信感を表明している。このような形で、言語の問題が提出される理由は、実は Descartes と Locke をめぐる問題が背後にあるからである。

第2章でのべた Descartes と機械論をめぐる問題を、ここでは、言語の問題の方へずらして、考えてみよう。彼は動物を自動機械として位置づけたが、その場合、このオートマトンを人間と区別するものとして、言語能力を問題にする。

Dont le premier est que jamais elles * ne pourraient user de paroles, ni d'autre signes en les composant, comme nous faisons pour déclarer aux autres nos pensées. Car on peut bien concevoir qu'une machine soit tellement faite qu'elle profère des paroles, et même qu'elle en profère quelques-unes à propos des actions corporelles qui causeront quelque changement en ses organes: comme, si on la touche en quelque endroit, qu'elle demande ce qu'on lui veut dire; si en un autre, qu'elle crie qu'on lui fait mal, et choses semblables; mais non pas qu'elle les arrange diversement, pour répondre au sens de tout ce qui se dira en sa présence, ainsi que les hommes les plus hébétés peuvent faire.³⁶⁾

*machines, automates

その第1は、そのような機械は、私どもが思うところを伝えあうために実行するとおり、言葉を用いることも、これを組み立てて別の合図を用いることも、決してできぬということである。なるほど言葉を発するような機械を工夫することはできる。のみならずこの箇所に触れて痛いかんとか叫ばせるというように、その器官に多少の変化をおこす物体的作用につれて、ある種の言葉を発する機械を工夫することはできよう。がいかに鈍い人間にでもできる程度に、目の前で語られる一切の意味に対して応答するだけの言葉をかれこれ按排する機械は

考えられない。(落合太郎訳)

そして、この言語活動の点で、鳥獣が人間より少く理性を持っているのではなく、鳥獣がそれを全く持たないということを説明しようとしている。したがって、Descartesにおける精神的実体というものの存在証明は、言語という点に、最も力点がおかれることになる。

一方、Lockeは実体観念について、「感覚によっても、反省によってもこの観念をもたないし、また、もつことができないのである」³⁷⁾と考へて、実体の不可知なことをくりかえしのべている。そして、実体とは、単純観念の集成に他ならないとしている。³⁸⁾

それでは、Lockeにとって、言葉とは何であるのか、彼にとって、言語は観念の記号である。観念は、感覚と反省からうけとった単純観念(simple idea)と、その集成である複雑観念(complex idea)に分けられる。(もっとも厳密には、この単純な観念から複雑な観念が発生する論理を彼は様相実体をめぐって、細かく展開している。)言語が記号である以上、単純観念をあらわす記号もあれば、複雑観念をあらわす記号もある。したがって、言語の闡明と観念の獲得は同じことになる。³⁹⁾ところが、Lockeにとって、言語とは、あくまで名辞(term)と観念の対応関係となるので、名辞の一般性(general term)の問題が、言語の中心問題になる。これをLockeは次のようにのべる。

そこで、ことばを使うのは私たちの内部の観念の外部の標印(mark)としてであり、この観念は個々の事物から取られるのだから、もし私たちの取り入れる個々の観念がすべて個々の名前を持つとしたら、名まえは限りなくなければならぬ。これを防ぐため、心は個々の対象から受けとった個々の〔特殊な〕観念が一般的になるようにする。これはこれらの観念を、他のすべての存在や時間とか場所とかのような、実在するときの諸事情やその他いっさいの同伴観念から切り離されて、心に現われたものとして考察することによって行なわれる。これが抽象(abstraction)と呼ばれ、これによって、個々の所有者から取られた観念は、同種類のすべてのものの一般的代表となり、その名まえ、すなわち一般名が、そうした観念に合致して存在するどんなものにも当てはめられる。⁴⁰⁾

ここにのべられているような抽象化によって、個別的な観念は普遍的なものになる。Lockeは言語をめぐる問題の中心をこの抽象能力にのべているのである。

以上のようなLockeの言語観から見て、動物と人間の差異は、どんな点にみとめられるのであろうか。それは次の2点である。

i) 動物は、抽象化の能力を持たない。⁴¹⁾

ii) 動物は、単純観念を複雑観念に集成する能力がおとる。⁴²⁾

したがって、言語の有無は、人間と動物を差別する指標ではない。それは、観念を集積したり、変容したりする能力の程度の差をあらわすにすぎない。彼はDescartesとはちがって、動物にも理知(reason)を認めるからである。

また、動物類が一般的なことばを使わず知らないことを、分節音の形成に適当な器官が動物類に欠如しているせいにはできない。なぜなら、私たちの見いだすところでは、動物類の多くは分節音をこしらえて、ことばをまったく判明に発音できるが、そうした〔一般的なことばというような〕適用はけってしないからである。また、他方では、器官に欠陥があつてことばを欠く人々も、一般的なことばの代わりに役だつ記号で普遍的な観念を表現するのに事欠かない。これは、私たちの見るところでは、獣類の及ばない機能だ。それゆゑ、この点でもろもろの種の動物類は人間と弁別され、これが動物類をまったく〔人間から〕分離する本来の違いで、この違いはついに〔動物類と人間との〕あれほど広大な距たりにまで広がると、そう想定してよいと思う。というのは、もし動物類がとにもかくにも観念をもつていて、(ある人の主張したように)単なる機械でないとしたら、動物類に多少の理知〔ないし推理機能〕のあることは否定できない。動物類のあるものがある場合に〔理知を働かせて〕推理することは感官覚をもつことと同じように明白だと私には思われる。とはいへ、動物類は感官から受けとったそのままの個々の観念で推理するだけである。動物類はその最高のものでさえ、こうした狭い限度内に閉じこめられていて、なにかの種類の抽象によって観念を拡大する機能を(私の考へでは)もたないのである。⁴³⁾

さて、以上のようなDescartesとLocke両者の言語をめぐる態度を前程として、先のSwiftの叙述を考へてみると、彼は、Lockeにおける抽象作用、複雑観念の形成の問題を捨象して、ただ「観念の記号としての言語」の側面のみをとりあげているといつてもよからう。

もっとも、Lockeの観念は事物ではない。観念という

のは、「およそ人間が考えるとき、知性の対象であるものも表わす」⁴⁴⁾のであって、決して事物そのものとは混同されていないからである。しかし、この観念は、さきにも述べたことではあるが、経験から、人間の心にくるものである。⁴⁵⁾したがって、Lockeを純粋な経験論の方へ引きよせ、本有観念否定の態度を極端な地点にまでおしつめれば、Swiftの記述に近いものになるであろう。

一方、SwiftはDescartes的な態度とは無縁である。前述したような、人間と動物を同一視する彼の人間観が、Descartesの動物機械論とあいられないからである。

6. 結 語

さて、最後に残る問題は、以上のべてきたような諸思想の中で、Swift自身が、いかなる立場に身をおいていたかという点である。私は、これまでの論述の中で、この点はほとんどふれてこなかった。その理由は、とりあげられた諸思想に対してとるSwift自身の立場が、きわめて不明瞭だからである。いや極言すれば、矛盾だらけであるからである。これを人々は、Swiftの無節操、あるいは狂気のなしたるものと見るかもしれない。

しかし、私は、この時代の精神の諸潮流を、これほどまでにして的確にとらえていた人が、自己の矛盾を放置しておいたとは思わない。したがって、これは、むしろ彼の方法であったと考えてみたい。

あらゆる思想を知りながら、どの立場にも身をおかない態度（同時に、どの立場にもなりかわりうる態度）、自らの立場を意図的に隠して、対象の価値に関して、判断を保留する態度、これは、近代の懐疑論者達の基本的な態度である。このような態度を、方法として使ったからこそ、彼のGulliver's Travels第3部は、17世紀から18世紀にかけてのヨーロッパの諸思想の鳥瞰図となりえたのである。 (1976.9.7受理)

注

1) SwiftのGulliver's Travels製作年代を一覧してみると次のようになる。

1714 小人の国、哲学者の国の一部分の叙述。

1721~22 第1部(小人の国)、第2部(巨人の国)の完成。

1723 第4部(馬の国)の完成。

1724~25 第3部(Laputa etc.)の完成。ここに哲学者の国を含む。

以上の年代は、中野好夫著「スウィフト考」によ

る。

- 2) 例えば、人間界を縮小化して、俯瞰する、又は、その逆の場合。あるいは、人間をその動物的側面のみを極端に強調して表現する。ヤン・コットによれば、このような発想は、Pascalの中間者としての人間の把握に通ずる。
- 3) シラノ・ド・ベルジュラックの哲学的旅行記などに端を発し、現代のサイエンスフィクションにまで通ずる方法。いわゆるルネサンス期のユートピア小説は、これを科学の側面ではなく、政治と社会構造をめぐる諸側面において展開している。
- 4) 生物学が問題になるのは、いわゆる理神論的発想によってである。神の存在根拠を自然界において認めようとする時、物理的自然よりも生命的自然が、その証拠として有効になった時代背景がある。
- 5) Discours de la Méthode 50節。
- 6) Discours de la Méthode 54節。
- 7) もっともDescartesは、この記述のあとで、精気の運動は、力学の法則に従うことをのべている。しかし、よく考えてみると、これは、彼の機械論からくる理論的要請であって、理論の対象が空想物である以上、対象のない理論は、自己矛盾の隠蔽といわねばなるまい。
- 8) オートマトン(自動機械)は、力学的運動機構の組み合わせによって作られる疑似生命体であり、この時代は、最も精密な機械が「時計」であったため、時計じかけの複雑なものとして構想された。これが理論的に、実在の生物と等しいものになれば、機械論は首尾一貫性をもつのであるが、この可能性があるかどうかで、一方では、人間の精神能力の基盤に関する問題、他方では、神学上の問題をひきおこしていた。
- 9) この問題は、18世紀の哲学者達によって、物理的自然が、いかにして生命的自然となりうるかという形で、つまり、発生をめぐる問題として、考えられた。DiderotのPensées Philosophiques 19節、21節、をみてほしい。
- 10) G. T. P.223~P.224 (The Penguin English Library)
- 11) G. T. P.224 .
- 12) G. T. P.226.ここでは、高圧浣腸による療法が

- のべられているが、空気を吹きこむ場合と、吸い出す場合の全く相反する2つの方法が、共に有効であるとされている。
- 13) G. T. P. 232
- 14) Hobbes, Leviathan 序説をみよ。
- 15) G. Bachelard, la psychanalyse du feu, p.105
- 16) Georg Ernst Stahl (1660~1734) が燃素説を唱えたのは、18世紀初頭、丁度、この Swift の時代である。
- 17) G. Bachelard, la psychanalyse du feu p. 107. カラのこの論述の年代は1787年である。Swift の時代より、半世紀あとですら、こうした考えが生きていたのだ。
- 18) G. T. p. 224.
- 19) 「生命を持った物質の方が生命を持たぬ物質より単純である、と主張する化学者もすくない。たとえば1738年にジョフロアは、実証主義的な体系をとるはずの方向とは逆の方向に、その探求をすすめている。かれはいつている。『金属の実体の方が植物、動物よりも組織が緻密で、締っていて、粘着力が強いので、その要素を区別し、その違いを認めたいならば、はるか長時間におよぶ執拗な研究を要する。』18世紀末、いや19世紀初頭においても、化学者には有機物を直接的に研究する傾向がある。1788年にラヴォワジユはなおも、煨焼した鉄の硫酸塩とともに、蠟や油や象牙や澱粉や肉を蒸留している」Gaston Bachelard 「科学的精神の形成」及川他訳. p.201~p.202.
- 20) le psychanalyse du feu p.109.
- 21) i) G.T. p. 225
ii) G. T. p. 231
- 22) G. T. p. 227
- 23) アリストテレス「形而上学」第1巻第1章。
- 24) G. T. p. 205
- 25) E. ガレン「イタリア・ルネサンスにおける市民生活と科学・魔術」清水純一、他訳p.65~p.67
- 26) G. T. p. 224
- 27) アリストテレス「動物誌」9巻38章
- 28) アリストテレス「動物誌」9巻40章~43章
- 29) アリストテレス、「動物誌」9巻7章、岩波版全集、8巻p.64~p.65
- 30) Gulliver's Travels 第3部において、Laputa (飛び島)とその下の支配地 Balnabarbi の関係は、英本国とその植民地アイルランドの関係をあらわしている。
- 31) E. ガレン 上掲書. p.43
- 32) これらの理想都市の同心円構造は、完全なものは円であるとする、Platon 主義的理論のあらわれである。円形都市の中心部は、政治の中心地に割りあてられ、そのまわりに、同心円的に、隔壁、あるいは水路がつくられ、中心から周辺にむかって階層的に順次、居住地が割りあてられる。
- 33) G. T. p. 224
- 34) 「およそ心が一度も知覚しなかった観念はすべて心に一度もあったことがない。心にある観念はすべて現実の知覚であるか、さもなければ、かつて現実の知覚であって、〔今は〕記憶によってふたたび現実の知覚になることができるように心にあるか〔、どちらか〕である。ある観念の記憶を欠いた現実的知覚があるとき、その観念は知性に完全に新しく、前には知らなかった、そんなように現われる。〔反対に〕記憶がある観念を現実に見させるときはいつも、観念は前に心にあったことがあって心のまったく見知らぬものでなかったという意識を伴う」「人間知性論」第1巻4章21節、岩波文庫(1) p.121~p.122
- 35) G. T. p. 230
- 36) Discours de la Méthode 56節~57節。
- 37) 「人間知性論」第1巻4章19節、岩波文庫(1) p.119
- 38) 「それゆえ、実体一般の隠れた深奥の本性がなんであろうと、個々別個な種の実体について私たちのもつ観念はすべて、単純観念のいろいろな集成、すなわち、不知ではあるが単純観念の合一の原因であって単純観念全体をみずから存立させるようなものうちに共存する、単純観念のいろいろな集成にほかならない。私たちが個々の種の実体を私たち自身に表象するのは、単純観念のこうした集成によるのであって、それ以外のどんな事物にもよらない。」「人間知性論」第2巻23章、岩波文庫(2) p.248
- 39) 「実のところ、言語はこうした〔観念の〕集成を表わすことばで充満している。したがって、こ

の複雑観念をえる通例の道は、これを表わす名辞を闡明することによる。というのは、こうした複雑観念は、集成された単純観念の一团からなるので、そうした単純観念をあらわすことばによって、このことばを理解する者の心に表象されることができて、たとえ単純観念のこうした複雑な集成が事物の实在によってその人の心に一度も呈示されずともよいのである。」「人間知性論」第2巻22章3節、岩波文庫(2) p. 233

- 40) 「人間知性論」第2巻11章9節、岩波文庫(1) p. 227～p. 228
- 41) 「すなわち、抽象する力能は獸類にまったくなく、一般観念を持つことは人間と動物類とを完全に区別させるものであり、動物類の機能のけっして到達しない〔人間の〕卓越した点なのである。」「人間知性論」第2巻11章10節、岩波文庫(1) p. 228
- 42) 「なぜなら、〔たとえば〕犬の主人の姿や匂いや声はたぶん主人について犬の持つ複雑観念を作るように、あるいはむしろ、それらはそれぞれ犬

が主人を知る判明な標印であるように、動物類は単純観念の集成を取りいれて把握するが、さればとて、動物類がかりにも自分で観念を複合し、複雑観念を作るとは、私は考えない。」「人間知性論」第2巻11章7節、岩波文庫(1) p. 226

- 43) 「人間知性論」第2巻11章11節、岩波文庫(1) p. 229
- 44) 「人間知性論」第1巻1章8節、岩波文庫(1) p. 39
- 45) 「そこで、心は、いってみれば文字を全く欠いた白紙で、観念はすこしもないと想定しよう。どのようにして心は観念を備えるようになるか。人間の忙しく果てしない心想がほとんど限りなく心へ多様に描いてきた、あの膨大な貯えを心はどこからえるか。どこから心は理知的推理(reason)と知識のすべての材料をわがものにするか。これに対して、私は一語で、経験からと答える。」「人間知性論」第2巻1章2節、岩波文庫(1) p. 133～p. 134

〔筆者 本学講師〕